

生成文法における構文研究*

戸塚 将

1. 序

生成文法理論の研究にとって構文研究は、理論を進展させる上で重要な役割を果たしてきた。しかし、近年の生成文法理論は理論的に抽象度が高くなっており、理論研究は理論研究、構文研究は構文研究としてお互いの乖離が見られる傾向がある。もちろん、この点を意識した優れた研究はあるが、今一度生成文法理論における構文研究の重要性を再考する機会を持てればと思い、本論ならびに、本 SYMPOSIA を企画することになった。

2. 生成文法理論研究の変遷と構文研究

生成文法理論研究は1950年代から始まったが、初期理論においては人間言語の特性を捉えるために句構造規則と変形規則による研究が進められてきた。特に、変形規則は構文毎に変形操作を仮定し、その特徴をどのように捉えられるかという分析が行われてきた。例えば受動文に適用される受動変形は(1)のような変形規則として定義される。

(1) 受動変形 随意的

構造分析:	NP	Aux	V	NP	
構造変化:	X1	X2	X3	X4	→
	X4	X2+be+en	X3	by+X1	

変形規則自体は強い操作であるため様々な文を生成することが可能となってしまう。しかし、実際には文法的な文と非文法的な文が存在するため、それぞれの構文にどのような制約があるかという研究が進められた。代表的なものとしては Ross (1967/1986) の島の制約が挙げられる。その後この制約は Chomsky (1973) の下節の条件として、制約を一般化する方向で理論研究が進められた。さらに Chomsky (1977) では、wh 疑問文、分裂文、比較構文、関係節、tough 構文といった各構文には演算子移動が派生に関わっているものとして統一的に扱う事ができることを示した。これらの研究の進展が示すように生成文法理論は個別の現象や規則を一般化していこうという形で進められてきた。その後 GB 理論で移動操作は Move α へと統一される。そして現在の極小主義の併合という操作にまで簡素化されるに至る。

生成文法理論の研究が現在の形にまで至るには、初期の構文研究の蓄積があることは明らかである。理論が変遷していく中で各時代にコアデータとなる現象はいくつか存在した。それらのデータを基に仮定される装置や操作が変化していき、理論の説明力を高める方向へと進展していった。理論が進むことで過去には解決ができなかった言語事実も説明や分析が可能になる点も生成文法理論が正しい方向に進んできた証拠でもある。もちろん、現在まであらゆる記述的なデータが出尽くしているわけでもなく、過去に発見されているデータでも未解決の問題のまま残されている言語事実も存在はする。この点でも構文研究自体は今後も生成文法理論の研究においては重要な役割を果たすものと考えられる。

3. 今後の構文研究について

本節では、今後の生成文法理論における構文研究についての展望を簡単に述べていきたい。現在の構文研究は理論を進展させるために行っているものやいわゆる語法研究的に行われているものといったものなどが存在している。理論の抽象度が上がれば、説明のために用いる道具立ても少なくなるのでいわゆる記述的な研究との乖離が出来てしまう恐れもある。また、単に理論を用いて言語事実を分析するだけの研究にとどまってしまうといったことも指摘されることもある。このような研究が間違いであるという訳ではないものの、理論の深化を考えたときには研究者として自覚して置かなければならない点である。

語法研究的な形での研究も言語事実をどのように説明するかという点で素晴らしい成果が挙げられている。しかし、そこだけでとどまってしまう、より深い本質的な説明を求めていくことが出来ないのでは生成文法理論の進展は望めないことになる。

このような難しい状況に置かれているように感じるときに思い出されるのは下記のチョムスキーのインタビューからの引用である。

チョムスキー ...おそらくこの分野は、将来極めて記述的なものになっていくであろうと思います。特に、意味と音声の領域で記述的な研究がなされていくことになるでしょう。やるべき研究が山ほどあり、しかも非常にややこしいものばかりです。ひたすらそういうものを細かく調べ続けることになるでしょうね。私の見る限り、理論的説明に関してはなすべきことはあまりなさそうですが。ただ物事がうまく行くようにするだけです。そして、そのためにやるべき研究は山ほどあります。

ある分野がこれからどのように発展していくかを判断するのに良い方法というのは、「博士論文が書けるような研究テーマにはどういうものがあるか」という問いを立ててみることです。これが、その分野のこれからの発展をかなりの程度規定しているものだからです。というのも、研究者は、博士論文がちゃんと書けるような研究テーマを見つけなければなりませんし、おそらくそのテーマをその後も研究していくことになるでしょうから。もし私の学生がやってきて、「極小主義に関するテーマで研究すべきでしょうか」と尋ねたならば、私は次のように言うでしょう。「いや、それはあまりに難しすぎる。ちゃんと博士論文が書けるようなテーマ、つまり四年間できちんと完成することができて、しかも結果がちゃんとした出来映えになるような研究テーマが必要なら、一番いいのはもっと記述的なテーマを選ぶことです。そうすれば、ある程度の希望を持つことができます。もし、もっと野心的な研究に挑戦したいと思うのなら、それは構いませんが、博士論文でやろうとしてはだめです。」こういったことが、ある分野の将来の方向を規定するちからとして働くのです。(チョムスキー著、福井・辻子(訳) (2004/2011: 375-376, 引用は2011の文庫版より))

少し注意が必要なのは、ここでの「記述的研究」というのはGB理論期のレベルでのものであるという点である。ただ、理論を単に追うだけでなく記述的な構文研究を行い続けることの重要性は消えないことはここからもわかる。理論研究と記述的な構文研究との関係を知る上では、中島(2001)、中村・金子(2002)、Everaert and van Riemsdijk(2017)が大変参考になる。

どのような言語事実を見つけていくかという研究は地道なことも多く、大変ではあるものの生成文法理論研究を支える大事な部分である。この点に関しての一つのヒントとなるのはKayne(2005)のようなマイクロパラメータの研究が挙げられる。現在、表層上の言語の違いや言語変異は外在化の問題として扱われ、統語部門では扱わないものとしているが、Kayneが英語とフランス語という近い言語間の言語差異を統語演算に関係する機能範疇要素の中にパラメータとして存在する可能性をあげている。これらが統語演算に働く形式素性として捉えれば、外在化の問題ではない形で言語差異を説明する可能性が示唆される。しかも、Kayneが挙げた機能範疇要素は約40個であるが、これらの言語現象は凄く特別なものを扱っているわけではなく、これまでに取り上げられてきたもの、見逃されてきたものが含まれている。これらを参考にすることで生成文法理論の研究には記述的な構文研究から貢献できること言語事実が多く存在していることがわかる。

基本的なことであるが、データを見るためには理論が必要である。理論が重要なのはいうまでもないことではあるが、データが重要ではないというような単純な話として捉えるのではなく、データから理論を見つめる視点もまた必要である。その点でも新しい言語事実を発見するための構文研究は行い続ける必要があることを改めて認識する必要があるということである。

参考文献

- Chomsky, Noam (1973) "Conditions on Transformations," *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen Anderson and Paul Kiparsky, 232-286, Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian, 77-132, Academic Press, New York.
- チョムスキー, ノーム 著, 福井直樹, 辻子美保子 訳 (2011) 「生成文法の企て」, 岩波現代文庫, 東京.
- Everaert, Martin and Henk van Riemsdijk eds. (2017) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax, Second edition*, Wiley-Blackwell, London.
- Kayne, S. Richard (2005) "Some Notes on Comparative Syntax, with Special Reference to English and French," ed. by Guglielmo Cinque and Richard S. Kayne, *Handbook of Comparative Syntax*, Oxford University Press, New York.
- 中島平三 編 (2001) 『[最新] 英語構文辞典』, 大修館, 東京.
- 中村捷, 金子義明 編 (2002) 『英語の主要構文』, 研究社, 東京.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on variables in syntax*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Ross, John Robert (1986) *Infinite Syntax!*, Ablex Publishing, Norwood.